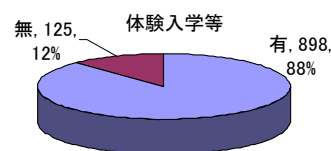


第2章 幼保小連携の現状と課題（Ⅰ）

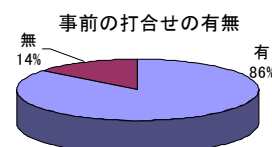
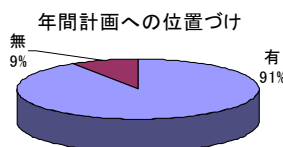
－ 異年齢交流の取組み －

1. 体験入学などの交流

右のグラフのように、ほぼ9割の小学校で新1年生の体験入学が実施されている。以前多かった幼稚園ごとに小学校へ招待されて1年生の教室や職員室、体育館などを見学するという形態から、1年生の教室で小学生にサポートしてもらいながら字を書いたり、工作を体験したり、ゲームを楽しんだりするような中身の濃い体験入学を実施する学校が増えてきている。参加した園児たちは小学校入学に対する不安が減り、期待感が大きく膨らんだようである。



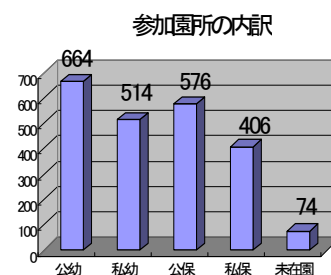
実施時期は、入学前の3学期が多く、年間計画に位置づけている学校が91%あった。ねらいをしっかりと決めて、内容が充実するように事前の打合せをしている学校は8



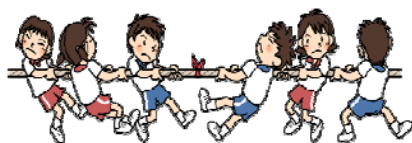
6%あるが、事後の反省会は62%に減る。「体験入学ありき」でなく、ねらいや効果をしっかりと見極めた取組みが必要である。一方、1学期からグループを固定して、学期に1回程度の交流を重ね、3学期に体験入学を実施するというように丁寧に取り組んでいる学校もある。

■ 「統一体験入学日」のすすめ ■

参加する幼稚園・保育所については、公立・私立間でやや違いが見られるものの極端な差は見られない。しかし、私立幼稚園や保育所では、入学する小学校が複数に分かれるため、比較的参加しにくい状況がある。各市町村内において、体験入学の日を統一して一斉に実施すれば、今まで以上に私立幼稚園や保育所の子どもたちが参加しやすくなる。



2. 運動会などの行事による交流



運動会で何らかの交流を実施している学校が約4割ある。小学校に招待されて園児がダンスをするという取組みから、幼保小合同の競技や演技に取り組んでいる学校もある。

また、運動会は地域の行事という所もあって、隣接する幼稚園と小学校、中学校が合同で運動会を開催しているところもある。中学生が園児を背負って運動場を走ったり、小学生が背負って逃げ回るかごに園児が紅白の玉を入りに回ったりするなど大変ほほえましい光景である。

3. 生活科や総合的な学習の時間などでの交流



体験入学やイベント的な行事の交流に加えて、下のグラフのように、生活科や総合的な学習の時間など、「学習」に位置づけて組織的に計画された交流が増えてきている。生活科では約半数、総合的な学習の時間では約2割の小学校で実施されている。

1・2年生が自分たちで準備したゲームコーナーに園児を招待して、一緒に楽しむという取組みもある。年間2回以上実施するという学校が180校25%、4校に1校の割合で継続して取り組まれている。

5年生が、総合的な学習の時間に福祉等に関するテーマを決めて園児と交流するという取組みもある。

「取組みの成果」に関して、生活科での取組みは36%の小学校でとても効果があったと認められている。給食交流など他の交流と比べてみると、生活科や総合的な学習の時間に位置づけた取組みが、10ポイント以上高く「とても効果があった」と評価されている。それだけ、教科等のねらいをしっかりと決めて取り組まれたと考えられる。園児は小学校を知る機会が増えて安心感が生まれ、小学生は教科等の目標を達成することに加え、園児と接する機会を持つことにより、責任感や自己有用感をもって自尊感情を培うことができたような例が多い。

参加園所の種別では、公立幼稚園に比べ、公立保育所、私立幼稚園・保育所の参加が比較的少ない。子どもたちが複数の小学校に分かれて入学する上に、保育時間など形態が違うというような様々な理由がある。

4. まとめ

- 異年齢交流は、不登校や小一問題、学級がうまく機能しない状況といった教育課題を未然に防いだり、解決したりする一つの方策として大変有効である。
- 異年齢交流は、教育課程に位置づけた計画的なものが増えてきているが、交流のための事前打合わせや事後の反省会を実施しているところが少ない。ねらいを明確にし成果を評価しながら、子どもたちが相互に満足感や充実感を持てるような工夫が必要である。
- 私立幼稚園や保育所と小学校との連携はあまり進んでいない。就学前人口の8割近い子どもたちが在籍していることを考えると大きな課題である。できることから少しずつ始めて、地道な成果を積み重ねていくことが大切である。

